

芸術活用型まちづくり事業における住民協働意欲醸成プロセスの課題分析 ～上勝アートプロジェクトを事例として～

福井県小浜市 正会員 ○藤田卓弥
徳島大学工学部 正会員 滑川 達
徳島大学工学部 正会員 山中英生

1. はじめに

近年、中山間地域における諸課題が、より一層顕在化してきた。それらの諸課題を解決するために行われる参加型まちづくりには地域住民の協働意欲が必要とされている。また本研究が取り上げる芸術活用型まちづくりは、芸術を中山間地域に配置することによって、その地域の生活様式を強く印象付け、地域活性化を促すというまちづくりのことである。このまちづくりにおいて地域全体を巻き込むためには、地域住民の「プロジェクト内容」の理解と「プロジェクトが繋げる社会的価値」の理解や実感が協働意欲の醸成・持続にとって非常に重要であると考えられる。

そこで本研究では徳島県上勝町のアートプロジェクトを調査対象とし、町役場産業課を中心とするプロジェクト事務局からの情報に対する地域住民が求めている潜在的ニーズの分析を通して芸術活用型まちづくり事業における住民協働意欲醸成プロセスの課題を整理し、その改善に向けての基礎的知見を得ることを目的としている。

2. 上勝アートプロジェクト概要

上勝アートプロジェクトは平成19年度に徳島県で行われる国民文化祭の上勝町における事業として始まり、その後も継続的活動を目指している。主な事業内容は上勝町の5地区に著名な作家が訪れ、作品の製作と設置を行うというものである。この事業は材料提供や製作協力など様々な地元住民の協力を必要不可欠としている。さらにこの「プロジェクトが繋げる社会的価値」として、例えば上勝町の美しい里山の景観形成やその適正管理につながる可能性を有していると考えられる。

なお、事務局は事業開始の平成17年度から現在まで8回の勉強・準備活動、32回のPR活動、19回の委員会や会議を実施し、様々な形で住民に情報を発信してきた。

3. 上勝アートプロジェクト関係者ヒアリング調査

ヒアリング調査の目的は、上勝アートプロジェクトプロセスにおける事務局からの情報発信状況の中で参加者が感

じていた雰囲気や思いを知り、事務局に対する潜在的ニーズを把握することである。ヒアリング調査対象者はプロジェクトに参加している地元住民8名、地元NPO関係者2名、地元企業関係者1名であり、ヒアリング調査は過去の会議等のまとまった時期ごとに行っており、調査項目は「このころ期待していたことは何ですか」や「このころ欲しかった情報は何ですか」など各時期、13項目となっている。

4. 上勝アートプロジェクト関係者ヒアリング調査結果

ヒアリング調査で得られた意見より、町内参加者が求めている潜在的ニーズは3つの理解から構成されていることが判明した。その3つの理解とは以下のようにになっている。

理解① 「事業の責任体制と意思決定プロセス、国民文化祭までのスケジュールの理解」

この理解は、事業主体の責任体制のあり方やプロジェクトの意思決定プロセス、国民文化祭の詳細やそれまでのスケジュールの理解のことである。例えば、「(国民文化祭を見据えて) 作品づくりの段取りがわかってよかった。」「このプロジェクトの事業主体は誰なのかわからない。」などが理解①に基づく意見にあたる。

理解② 「芸術作品が持っているコンセプトの意義と作家の人柄の理解」

この理解は、作品の説明や作家の芸術に対する思いを聞くことによって深まる理解のことである。例えば、「作家自身がコンセプトをもって取り組んでいるし、期待度が高まった。」「作品のコンセプトが、思っていたコンセプトとは違うなと思った。」などが理解②に基づく意見にあたる。

理解③ 「芸術作品が上勝にできることの将来的意義の理解」

この理解は、「このプロジェクトによってこの町、この地域もしくは自分にどのようなメリットを将来的に与えることになるのか」ということの理解である。例えば、「プロジ

エクトを通して上勝の周知や若者の定住のきっかけになればと思った。」「国民文化祭への参加に当たって、アートにこだわる意味がわからなかった。」などが理解①に基づく意見にあたる。

理解①・②は「プロジェクトの内容」、理解③は「プロジェクトが繋げる社会的価値」を構築していると考えられる。そして各理解の意見数の比率の推移を表したのが図1である。

4.1 理解①「事業の責任体制と意思決定プロセス、国民文化祭までのスケジュールの理解」

図2は理解①に基づく満足意見数と不満足意見数の度合いを、理解①の充足度としてその推移を示したものである。この図より、地域住民は常に理解①を補う情報を求めている

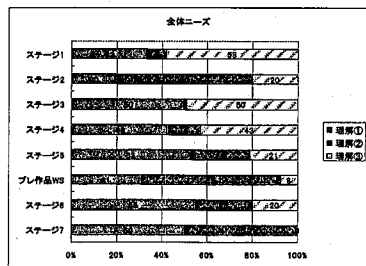


図1 参加者が求める理解の推移

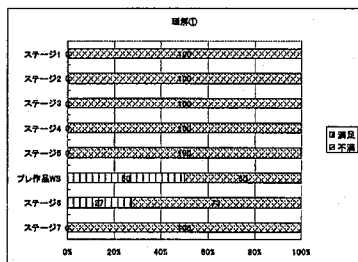


図2 理解①の充足度の推移

ことがわかる。その具体的意見の推移を分析すると「事業主体がわからない。」などの事業の責任体制のニーズから「具体的スケジュールを言ってほしかった。」などの今後のスケジュールのニーズに移行していることがわかった。これより事業の責任体制が明らかになり一定の安心感は得られているが、国民文化祭が間近に迫っているため更なる情報を求めている様子が伺える。よって理解①は、国民文化祭に近づくにつれさらなる情報が発信されるため充足していくと考えられる。

理解①は常に求められる情報であり、わかりやすい資料作成と説明が常時必要であった。特に未決定事項を求められることも少なくなかったため、「何が」「どのような意思決定プロセス」を経て「いつ頃までに」決定される予定であるかの情報提示が重要と考えられる。

4.2 理解②「芸術作品が持っているコンセプトの意義と作家の人柄の理解」

図1と理解②の充足度の推移を示した図3において、理解②の比率かつ充足度が高いときは作家と地域住民との交流の場が設けられたときであった。よって理解②を深める

ために、作家との直接的交流が最も効果的なコミュニケーション方法として活用されていたことがわかった。

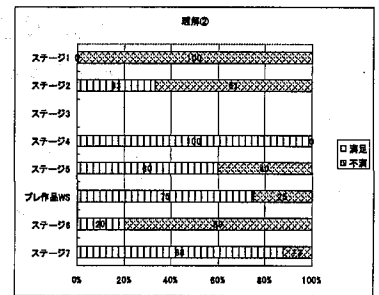


図3 理解②の充足度の推移

4.3 理解③「芸術作品が上勝にできることの将来的意義の理解」

図4は理解③の充足度の推移を示しており、この図を見ると一見理解③は充足されているように見える。しかし、図1

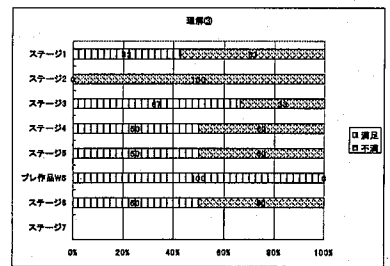


図4 理解③の充足度の推移

で確認できるように

理解③のニーズ・関心そのものが減少している。さらに、会議資料には「上勝アートプロジェクトは豊かな里山から価値を学び、里山と対峙し、里山の維持・保全に根ざした、里山をフィールドとした参加型芸術活動」という説明が記載されていたのだが、それが地元住民の参加行動を突き動かすものになっておらず、多数の地域住民が理解③をニーズとして意識していないことも判明した。また理解③を求めるニーズすら薄れていることは、プロジェクトが継続的活動を目指しているにもかかわらず、イベント型のプロジェクトと住民に捉えられていることを示唆している。

5. まとめ

理解③が不足しているためこのプロジェクトは継続的活動への機運が高まらない危険性を有しており、今後、コミュニケーション的改善が一部必要といえる。まず中長期的には、町の将来ビジョンとその中でのプロジェクトの位置づけを提示し、住民の長期的な協働意欲の醸成・持続を促すことが重要と考える。また早急にすべきこととして現在上勝町で見てきた来訪者のゴミ問題や作品の材料となる間伐材の調達方法などの具体的課題を解決していく過程を通して、住民意識の中に、適正な維持管理に基づく美しい里山づくりの実感・機運を促進するような雰囲気づくりへの行政努力が必要と考えられる。そして、このような全体的雰囲気を、現場観あふれる将来ビジョンづくりの第一歩へとつなげていくことが重要となってくるものと考えられる。